

評伝 北原白秋

藪田義雄著

玉川大学出版部

増補改訂

評伝 北原白秋

藪田義雄著

藪田義雄（やぶたよしお）

明治35年（1902）4月，神奈川県小田原市出生。県立小田原中学校卒業後，法政大学英文科に学んだ。

大正7年10月（小田原中学3年生のとき）北原白秋の門に入り，爾來その薫陶に浴し，多大の影響を受けた。昭和13年6月，その推轡をえて処女詩集『白沙の驛』を世に問い，詩壇における地歩を確保した。

代表著作——詩集『岸花』『火の獨樂』『水上を戀ふる歌』『散華頌』民謡集『夏鶯』をはじめ，交声曲・聖譚曲・合唱曲・歌劇等の詩作品のほか，『白秋詩歌一家言』『若い人への人生詩集』『詩話百話』および一連のわらべ唄研究を合せて大小50巻あり。

文筆をもって終始し勤めらしい勤めの経歴なし。東京都世田谷区祖師谷に30年余り住みついで二男一女を儲けたが，その後，妻とふたり町田市に移り住み，著述に専念している。

現住所 東京都町田市山崎団地7-29-301

評伝 北原白秋（増補改訂）

三八〇〇円

著者 藪田義雄 発行者 小原哲郎 発行 玉川大学出版部

一九四 東京都町田市玉川学園 〇四二七―三二―九一一

振替 東京八―二六六六五 印刷製本 図書印刷

初版発行 昭和五十三年四月一日

（分）〇〇三三（製）一二〇一九（出）四三五五

落丁乱丁の際はおりかえいたします

目次

序 章	父の国から母の国へ	1
第一章	白蝙蝠傘の記憶と水ヒアシンス	15
第二章	柳川脱出——上京前後	29
第三章	「文庫」から「明星」への道	41
第四章	五足の靴——天草、島原の旅	50
第五章	『邪宗門』開頭	68
第六章	空に真赤な雲のいろ	77
第七章	「わが生ひたち」と詩集『思ひ出』	84
第八章	所謂「桐の花事件」の真相	100
第九章	死なむとすればいよいよに	124
第十章	小笠原父島へ渡る	144
第十一章	うらうらと阿蘭陀書房のはじまり	164
第十二章	葛飾ぐらしあれこれ	176
第十三章	木兎の家建立まで	191
第十四章	その後の小田原生活と、『水墨集』の心境	208
第十五章	鳶よ、晴天の喇叭卒、鳶よ	243

第十六章	天を翔る	260
第十七章	酒の話、それから線香花火と蠅踊り	285
第十八章	成城学園と小原國芳	303
第十九章	台湾旅行と『華麗島風物誌』	311
第二十章	『溪流唱』と多磨歌風の展開	319
第二十一章	大手拓次の『藍色の藝』その他	334
第二十二章	薄明微茫の生活に入る	352
第二十三章	短歌創作にかかわる感興は千変万化する	366
第二十四章	阿佐ヶ谷消息	387
第二十五章	薄明吟『黒檜』をめぐる	402
第二十六章	帰らなむ、いざ鵲——最後の帰省	417
第二十七章	肉体は病んでも気力旺盛、まさに文学の鬼！	429
第二十八章	十一月二日午前七時五十分、臨終とその前後	442
第二十九章	「白秋先生追慕の会」のこと	456
年 譜		463
著書目録		482

あとがき

増補改訂版あとがき

序章 父の国から母の国へ

昭和四十四年十月三十一日、午後二時二十五分、私たちを乗せた日航機はちょうど富士山頂の真上を飛翔していた。すでに六合目あたりまで白雪に覆われた富士の全貌を眼下に鳥瞰したが、まことに眼も眩しいほどの景観であった。私はこれまでなどか空の旅をしたが、こんなにまざまざと富士を観たことはなかった。ひとつには近來にない快晴に恵まれたこと、富士山の真上を通るコースだったことがさいわいしたのだと思う。私たちは明十一月一日に予定されている白秋生家復元の記念祭に列席するため羽田空港を前日に出立したわけだが、一行は北原隆太郎、木俣修、與田準一、巽聖歌の諸君と藪田義雄という顔ぶれであった。

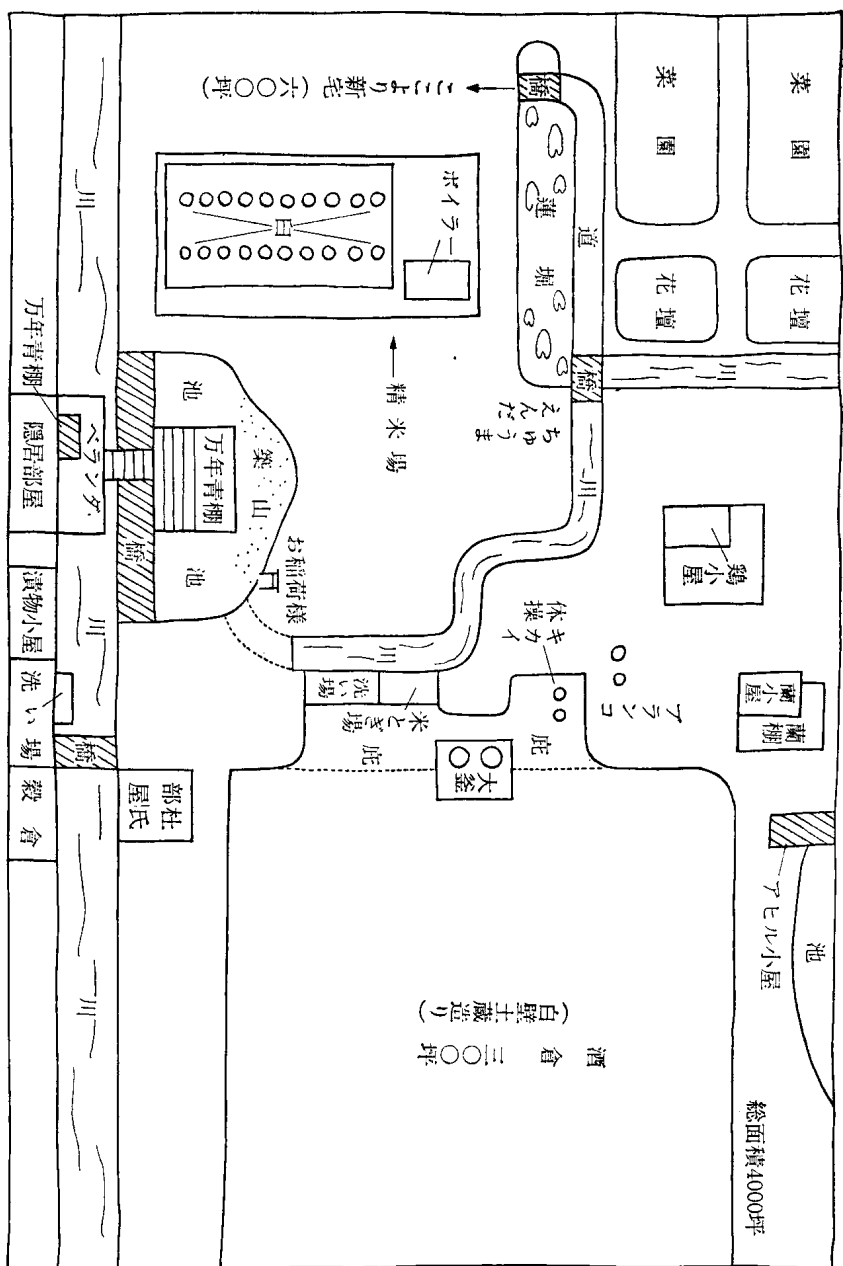
北原家は白秋十七歳の春、沖端^{おきのへ}の大火によって酒倉および新酒古酒の全部およそ三千石を焼尽したのが直接の原因となつて悲境に陥り、家屋敷もろとも人手に渡るようなことになった。その後、持ち主は転々したが、現在は佃煮^{てんし}製造業S氏の所有になつていた。が、S氏は事業上の手違いから土地とも数百万円の担保にはいつており、すでに三月末（昭和四十三年）で返済期限が切れ、債権者から解体して売却するという督促を受けていた。これを聞知した柳川市と市議会は旧家保存運動に起ちあがり、その対策を協議した結果、市が土地建物（注・敷地九十二坪十六、建物延八十坪、二階建土蔵造り）ともS氏から買取ることになり、その売買価格は千百五十万円と決定した。

柳川市がここまで決意するにいたつた経緯には、毎日新聞社が熱意をもつて主唱した「北原白秋生家保存運動」の

キャンペーンが預って力あったことは衆目の一致するところである。すなわち毎日新聞社はその全国的な組織網を動員して募金運動を推進し、募金締切日まで一年二ヶ月にわたって終始バックアップしてくれた。ひとり毎日新聞だけではなく、例えば西日本新聞そのほか地元の報道機関が協力してくれたことも、あわせて銘記しておきたい。

じつを言えば、北原家としては初めこの運動には消極的だった。生家を保存しようというひとたちの善意にはもとより感謝するとして、その反面には多くのひとたちに御迷惑をかける結果になる、解体される運命にあるものならばそれもやむを得ないのではないかという、「諦め」に似た考え方があったことは事実である。白秋の生前、その一月二十五日の誕生日に友人知己ならびに一門の者が白秋を囲んで交歓するという動機から出発した「白秋会」は、没後は先師を偲ぶというかたちに変ったが、会は毎年おなじようにつつけられて今日にいたっている。その白秋会は私の宅に連絡所が置かれ、私が司会をつとめている関係上、新聞社から再三となく電話の照会があったりしてその都度、御遺族と談合をかさねたが、いつも控え目の御意向のようだった。ところが六月初旬、柳川市長古賀杉夫氏が上京して、正式に白秋会へ協力を要請されるにおよんで、ここにわれわれは一門の意思を結集して起ちあがることになった。すでに募金本部は柳川市教育委員会に置かれていたが、白秋会は別に募金事務局を婦人画報社内 に設け、直ちに趣意書の作製にかかった。世話人には大木惇夫、木俣修、巽聖歌、宮修二、本吉信雄、藪田義雄、與田準一、北原義雄の八名が名をつらねた。婦人画報社内 に事務局を設けたのは社長の本吉氏が白秋の親戚で、募金にかかわる煩瑣な事務を依頼するのに都合がよかったからであった。

こうしてはじまったわれわれの募金運動は、当初の締切日一月末日になっても送金が絶えないため一ヶ月ほど延期した。その後、名簿の整備や会計報告書の作製などに手間取ったが、四月上旬、柳川市役所内・募金本部に送金手続きを完了した。目標額をうまわる三百三十二万九千五百六十七円という淨財をいただくことができたのであった。



その後、募金本部は六月末日をもつて一応打切ったが、総額二千四百四十一万千七百八十六円に達し、当初目標額二千万円を遙かにうまわる「善意」をいただいたことになる。そこで生家復元工事は十一月一日の開館式をめざして急ピッチですすめられたが、七月中には谷口吉郎東京工大名誉教授、菊池重郎東海大教授の指導で、むかしの造り酒屋とそっくりの生家の設計図ができあがった。なにせ生家は人手にわたってたびたび手直しされており、これを原形に復元しようとしても抛りどころになる資料はなにひとつなかった。さいわい白秋の実姉江崎加代さんが存命なので、当時の記憶をたよりに生家の間取り図をつくり、これが設計の基礎となった。加代さんのことはまた後で触れるが、福岡県山門郡頼高町の酒造家江崎家に嫁いで、八十六歳という高齢であった。加代さんの記憶のふたしかなところは実弟北原義雄氏（アトリエ出版社社長）が補足して出来あがったのが別紙の平面図だが、あわせて酒倉を中心とする屋敷内の見取り図も作製された。とにかく隆盛時における北原家というものは、相当に広大な規模をもつて母家と酒倉とを囲繞していたことが窺われる。

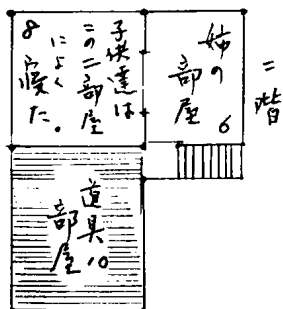
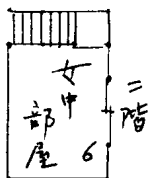
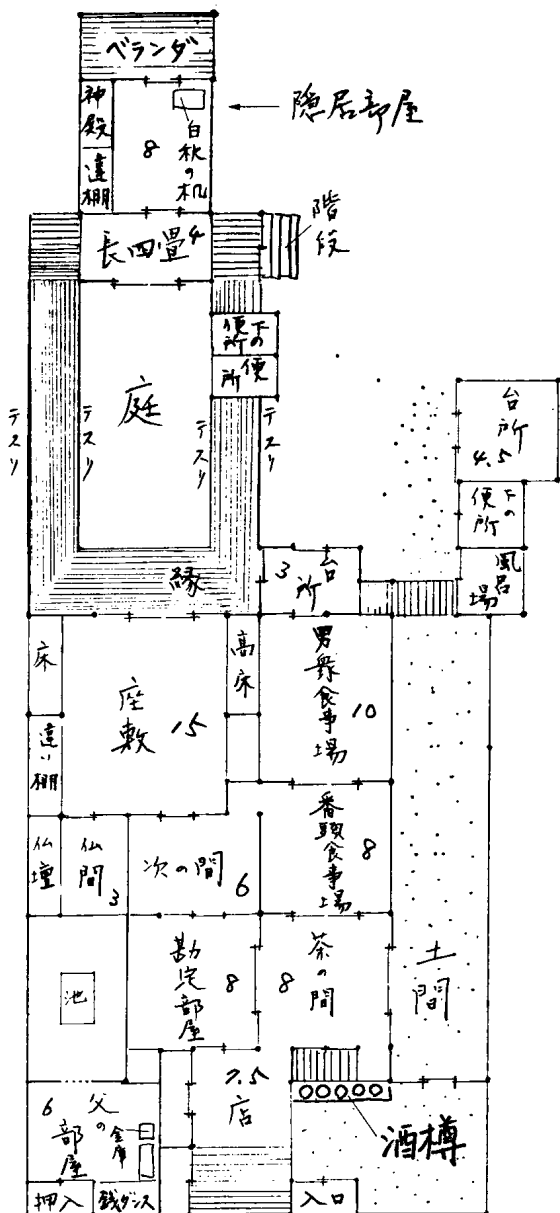
私たちを乗せた日航機三六三便は予定通り十五時二十五分、板付飛行場に到着した。毎日新聞社や西日本新聞社、柳川市役所代表などに迎えられ、車で西鉄福岡駅にむかった。筑後柳川まで特急で五十分。旅荘お花では先着の北原義雄氏夫妻、本吉信雄氏夫妻、および劉寒吉、原田種夫、野田宇太郎、木水彌三郎、宮崎康平、檀一雄その他の諸君といっしょになった。

その夜、大広間で古賀杉夫市長主催の歓迎宴が催された。

あくる十一月一日は上々の秋日和。

九時、^{どよめく}沖端の白秋生家前に集合。二十年ぶりにまみえる^{なまこが}生子壁の二層楼は、すっかり手入れがゆきとどいて、みち

白秋生家平面図



がえるように立派になっていた。子息隆太郎氏と古賀市長が紅白のテープに欽をいれた。待ち構えていた新聞社やテレビ会社のカメラマンがいっせいにフラッシュをたいた。

このあと、階下の一室で神事がおこなわれ、祖廟に復元が報告された。

急な階段を昇って二階に行く。そこは子供たちの勉強部屋で、奥の方の十畳間に白秋が少年時代に使用したという机があり、抽斗のなかに「北原〇雄」の落書きがみられた（〇のところ字体不明）。

五十七年ぶりで生家を訪れたという北原義雄氏は、「この壁には司馬江漢の六号の絵が懸っていましたよ」

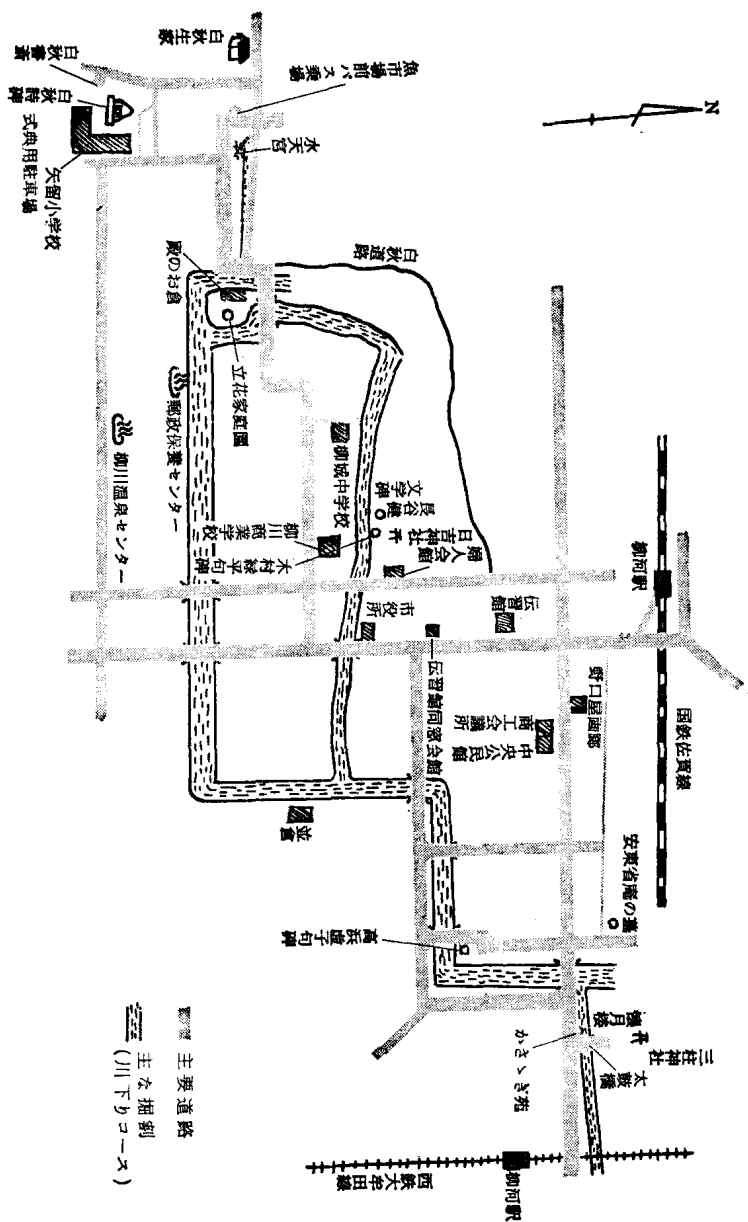
「司馬江漢というと、詩集『思ひ出』の口絵になっていたあれですか？」

「そうですよ。それから、あの物置の鴨居には、母が嫁入りしてきた時の駕籠が吊してあった……」

うしろにつき添う鶴千代夫人をかえりみて、さすがに感慨ぶかそうな面持ちである。それはそうであろう。ひとつたびは人手に渡り、借財のかたにとり壊しになる運命に晒されていたこの家であった。階下に降りると、右側のケースには半切その他の筆蹟、遺品のかずかず、著書や主宰の雑誌、レコード等が陳列されていて、どれもこれも馴染み深く懐しかった。とりわけてオランダの木靴を履いた等身大の肖像写真が、堂々とした恰幅をもって、ありし日の梯を髣髴させた。——（あれは大森緑ヶ丘時代の先生だな）私はじぶんに反芻した。

十時、矢留小学校講堂において記念式典を行ない、午後はまたひきつづき白秋を偲ぶ座談会が催された。

日暮れがた、欄干橋付近の乗船場には二十八隻のドンコ舟が用意されていた。柳川名物の川下りコースで賑やかな水上パレードを行なおうというのだが、これは二十七回めの白秋忌を明日に控えて、その前夜祭というわけである。先頭に洋楽の楽隊を乗せた舟がたち、以下番号順にドンコ舟がつづくのだが、そのなかほどにまた笛や三味線のお囃



水上バレーボールコース

子舟がいろいろいた気分を掻きたてる。舟べりにとりつけられた提灯に火がはいり、その灯のいろが夕闇に浮かびあがってきたのは、日はすでに暮れた証拠であらう。

鋤崎土手のあたりは川幅がもつとも広く、岸べの柳がしだれてひとしおの風情だが、やがて右折し、橋をいくつかくぐる。その橋の上にこぼれるような人だかりがして、さかんに提灯を振っている。兩岸にはべったりと人垣がつづき、花火を揚げ提灯をふりながら、「柳川バンザイ」「白秋バンザイ」の声しきり。こちらも負けずに舟べりに花火を燃やし、「柳川バンザイ」「白秋バンザイ」と怒鳴り返す。折詰の弁当が開けられ酒やビールの献酬けんしゅうがはじまる。飲みぬさきからもう酔うて、眼がしらがじんと灼けつくような感じである。私たちの船頭は声自慢らしく、白秋短歌を朗詠しながらたくみに竿をあやつり、舟をすすめていった。急に眼界があかるんで爆け飛ぶ火の粉、火の滝。ゆくての水上に用意された仕掛け花火である。それを合図にあちこちで呼応する打揚げ花火の色模様が妖しく美しく。

水上パレードが終りに近づいたころ、あのあたりが昔の武家屋敷の跡と教えられたが、もとよりはっきりわからうはずがない。かくして柳川十三橋をくぐりぬけ、水天宮ちかくの舟つき場に降りたつまでおよそ四キロ、一時間半にわたるさわやかな祭典であった。

翌十一月二日は日曜日の快晴。朝食前、車を用意してもらって白秋道路へ赴く。白秋はこの道をとって中学伝習館にかよったので、いつのまにか白秋小路とか白秋道路とかいうのが通称になってしまったようだ。このあたりが武家屋敷の跡と聞いて、私はもう一度、昨夜の水上パレードを思い出した。

そのあと、柳城公園内に長谷健文学碑を訪ねた。長谷健は『浅草の子供』によって芥川賞を受賞した柳川出身の作家。同郷の縁により白秋詩碑建立に挺身した功労者である。不幸にして奇禍に遭い昭和三十二年十二月没した。私は

碑のちかくから、せんだんの実、ナンキンハゼの実を摘んでポケットに収めた。

車を返して沖端の湯海を見にいった。あたらしく堤防ができたりしてだいぶ様相が変ってしまったが、それでも六騎（ロッキュ）の街をひと目みたので気がすんだ。

お花に戻って少憩するまもなく帰去来詩苑に赴く。二十七回目の白秋祭を行なう。古賀市長が一升枧に筑後の酒をなみなみと満し、それを杉の柄杓で詩碑にそそぎかけた。つづいて北原隆太郎君が遺族代表として、そして私が白秋会代表としておなじように一升枧から清酒をそそぎかけた。酒に濡れた碑面がくつきりと浮かびあがってきた。木俣君が門下を代表して簡単な挨拶を述べた。最後に女子高校生による「歸去来」の合唱（信時潔作曲）があつて式を閉じた。

式典のあと、ひきつづき詩苑において旧古賀村有志による郷土芸能の披露があつた。その一つ風流（ふりゅう）はまた浮立とも書く。延年舞に属するもので、二頭の獅子が太鼓を打ちながら舞う。「ヤーハイ」と繰りかえし歌うと、獅子をとり巻く袴（かみしも）すがたの鼓がたが十人、これに和してまた「ヤーハイ」と繰りかえす。初め私が興味ふかく感じたのは、からたちの垣根ぎわに古びた臼（うす）が据えられたことであつた。どうするのかと見ていると、注連飾（しめなで）りをいっばいつけた大太鼓がかつき込まれてきて、その臼のくぼみにどっかりと載せられたのである。なるほど思つたのだが、これが獅子舞の太鼓に使われると悟つたのはまたその後であつた。

奉納芸能のその二は県の無形文化財になっている、どろつくどんの踊りである。奇妙な面をかぶつた男が白扇をかざして踊るのだが、それがちよつと隠れたかとおもうと、またぞろ衣裳を変えて出てくるのである。その変通自在の所作を行なうために、仮設舞台の前面に一メートル幅の幕が張つてあるのだとわかつた。面の性格に伴つて踊りのしぐさも硬軟さまざまになる。それが面白かつた。

筑後、柳河、

てれつくてんの囃子、

娘御詠歌に

風流舞。

というのは白秋民謡「筑後柳河」の一節だが、踊りそのものを知らずにうたっていた囃子や舞いがこれであつたかと、私はこの日の演目に文句なしに惹きつけられている自分を発見した。

公式行事は二日ですんだので、三日の朝、木俣君は福岡へたち、與田・巽両君は清水観音詣でに出かけ、私は北原義雄氏夫妻、隆太郎君とともに古賀市長宅にたち寄つた。挨拶のためである。そのあと、瀬高の江崎和夫氏宅を訪問。先生の異母姉加代さんの嫁ぎ先であるが、老齢のためこのごろは床についておられるとのこと。江崎家は瀬高ではきこえた酒造家で、白秋揮毫するところの「菊美人」の額が応接間の壁間を飾っていた。

私は二十年前、帰去来の詩碑除幕式のあと（昭和二十三年十一月）、招じられて一夜の款待に浴したが、その帰京に際しては、当時まだお元気だった和夫君の尊父速雄氏が瀬高駅まで見送られ、菊美人一本を汽車の窓からさし入れてくださった。敗戦後、年まだ浅く、酒と名のつくものは容易に手にはいらなかった時代である。同行の中村正爾も無類の酒好きだったので二人で協定を結び、関門海峡を越えるまでは封を切らない申合せをした。ここでもなんでも一時間くらい停車時間があり、待ちくたびれて咽喉が鳴ったが、おたがいに牽制しあつて汽車が動きだすのを合図に乾盃した。単調な山陽線がこの酒のおかげで無聊を慰められたことは申すまでもない。だが、浜松まできて名物の竹輪が手にはいった時、南無三宝、かんじんの酒は底を突いていた。